

# 信毎俳壇

## 神野 紗希 選

愛国てふことばが軽しコスモス揺る  
 (中野市) 田川 寿男

アフリカの歩行猿人鱈雲  
 (長野市) 小林 明男

抱きしめて小さき助や秋日和  
 (岡谷市) 宮沢 羅夢

ナースステーション壁に夜食のメニュー表  
 (長野市) 荻原 宏祐

秋天や手斧で扶る山の巖  
 (松川村) 中野 重行

天高し移動図書館椅子二つ  
 (塩尻市) 長 三枝子

苔桃やヒュッタンクに貯める水  
 (佐久市) 西田 和彦

切手舐む秋思84円分  
 (中野市) 風間 陽介

稲の香や妻若き日の紺紺  
 (佐久市) 松瀬 孝雄

蚯蚓鳴くかそけき風や星増ゆる  
 (佐久市) 佐藤 勝子

佳作

夕暮の日溜りに来し赤蜻蛉  
 (飯田市) 大石 昭重

コスモスや言葉やさしき人と逢ふ  
 (佐久市) 栗林 貞夫

選評

一句目、愛国という言葉が政治利用され、軽々しく使われることへの疑義。真に国を愛するとは。群生のコスモスが問いかける。二句目、アフリカから始まった人類の歴史。二足歩行の猿人も、広々と鱈雲を仰ぐ屋があったか。三句目、幼い子を抱きしめれば、何と小さな肋骨だろう。その繊細さにハッとする。四句目、こんな夜食もある。夜を働く医療従事者の皆さんに、あらためて深く感謝を。

## 坊城 俊樹 選

手をのばし蜻蛉の止まるのを待つ  
 (白馬村) 碓井 つね

大黒様憑依するまで今年酒  
 (佐久市) 真山 邦弘

露の世やドンキホーテの話など  
 (宮田村) 金本 牧子

君知るや枕の下に菊の花  
 (松本市) 久我 綺乃

風鎮の軸物正す秋座敷  
 (下諏訪町) 中村 久

いにしへの闇に憩へる鏡花の忌  
 (松本市) 伊藤 和夫

宵闇の三本ころぶ徳利かな  
 (坂城町) 宮下 和夫

また一つ灯消える秋の暮  
 (木島平村) 日台 敏夫

掻き上げてポニーテールや秋の風  
 (長野市) 矢島あさ子

道化師のマンボ夜毎のかまじうま  
 (長野市) 武田 芳子

佳作

徒然やどんぐり独楽をポケットに  
 (飯山市) 田中 琢雄

母一人千の虫鳴く生家かな  
 (佐久市) 箕輪なつ江

選評

一句目、この句の明瞭かつ自由なものに引かれた。虚子の言う良い句の条件、「単純のこと棒の如し」という考えに見事マッチしている。ひよっとすると名句かもしれない。二句目、五穀豊穡の神様の大黒様が憑依するのかわ不明だがとにかく面白い。今年酒の酔いはことのほか楽しくてさぞや痛飲したのだろう。三句目、喜怒哀楽の露の世だからこそドンキホーテの笑い話を聞きたいものである。

## 今井 聖 選

昔見し本当の景秋浅間  
 (佐久市) 西田 和彦

汗の味昔は塩分多かりし  
 (佐久市) 水間喜美子

こぼろぎと対峙真昼の勝手口  
 (長野市) 荻原 宏祐

十月や内臓総て入れ替へて  
 (長野市) 矢島あさ子

キクイモのそよぐ川原やセシナ飛ぶ  
 (須坂市) 東島 雄一

友引の寺での句会秋の雨  
 (長野市) 中沢 義寿

講釈を聞いて田舎の蕎麦を食ふ  
 (松川村) 岡 豊村

ちちろ鳴く少し開けある厠窓  
 (小海町) 依田 久代

敬老日卓の丸干し頭をそろへ  
 (長野市) 水木 朱実

掛榴の二列目傾ぐ学校田  
 (佐久市) 吉岡 道明

佳作

酒の香を纏ふ若衆秋祭  
 (松本市) 伊藤 和夫

秋高し父の返球胸に受く  
 (立科町) 村田 実

選評

一句目、昔は本当の景色があったと紅葉の浅間山を前に作者は思う。それは郷愁を含めた感じ方の問題である。二句目、汗の味は昔はもっとしょっぱかったと作者は言う。これもまた極めて主観的な思い。二句とも説得力はある。三句目、勝手口で作者はこぼろぎを凝視している。一人と一匹の「対峙」である。四句目、秋が来て元気が出た。内臓を全て入れ替えたような健啖ぶりである。